

中学生の英熟語スキルに対する流暢性指導の効果の検討

——個別指導型学習塾における実験的介入を通して——

The Effect of Fluency Building on English Idioms for Junior High School Students

中塚 優介

Yusuke Nakatsuka

(立命館大学大学院応用人間科学研究科)

(Graduate School of Science for Human Services Ritsumeikan University)

Key words: 流暢性指導, 行動的アプローチ

目的

学業スキルに対して効果的な、行動的アプローチに基づく指導法のひとつに流暢性指導 (fluency building) がある。流暢性 (fluency) は「有能なパフォーマンスを特徴付ける正確さと速さの流動的な組み合わせ」と定義され (Binder, 1996), その指導においては、標的となるスキルをより速く正確に実行できるように指導・訓練が行われる (野田・松見, 2009)。しかし、スキルの保持、耐久性、応用という流暢性を特徴づける3つの側面については、練習量を統制した研究において、従来の正確性指導との差が一貫して示されていない。

本研究では、個別指導型学習塾に通塾する中学生を対象に流暢性指導による英熟語スキルの指導を実施し、練習量を統制した上で正確性指導との比較を行う。それにより、中学生の英熟語スキルに対する指導の効果と、それがスキルの保持・耐久性・応用の3つの側面とケアレスミスの発生に及ぼす効果について検討を行った。

方法

研究参加者

中学2年生1名であった。

手続き

本研究は、野田・松見 (2009) と同様のスケジュールで実施された。まず、指導対象の20個の英熟語スキルを獲得するために、獲得指導として離散試行訓練を実施した。次に、練習量を統制した上で流暢性指導と正確性指導を並行して実施し、各指導で10個ずつ英熟語スキルを指導した。流暢性指導は1分タイムトライアル (以下、TT)、正確性指導は離散試行訓練であった。

流暢性・正確性指導の前後には、プレテストとポストテストとして効果測定テスト (1分TT)、保持テスト (1分TT)、耐久性テスト (3分TT)、応用テスト (語句整序問題) を実施し、両指導の効果の差を検討した。

また、ポストテスト1から1週間後には、両指導の評価を得ることを目的とした事後アンケートを実施した。3項目について、流暢性指導・正確性指導の2件法での回答を求めた。

結果



Figure 1. 参加者Aの流暢性指導と正確性指導における1分間あたりの正答数。

参加者の流暢性指導と正確性指導における1分間あたりの正答数を Figure 1 に示した。効果測定テストの正答数は、プレテストからポストテスト1にかけて両指導ともに増加した。保持テストの正答数は、流暢性指導で指導した英熟語については減少傾向、正確性指導で指導した英熟語については増加傾向であった。耐久性テストと応用テストの結果からは、両指導の差はみられなかった。

また、ポストテスト1から1週間後に実施した事後アンケートでは、3項目中2項目について、流暢性指導についての肯定的な回答が得られた。

考察

本研究で実施した流暢性指導と正確性指導により、中学生の英熟語スキルの流暢性が向上したものの、スキルの保持・耐久性・応用、ケアレスミスの発生に及ぼす効果については指導間で明確な差はみられなかった。これについては、手続きの見直しを行った上で再検討を実施する必要があるといえる。

しかし、参加者が事後アンケートにて流暢性指導に肯定的な評価をしていたことから、指導法の新たな選択肢として流暢性指導を導入する価値は示唆されたといえる。

参考文献

- Binder, C. (1996). Behavioral fluency: Evolution of a new paradigm. *The Behavior Analyst*, 19, 163-197.
- 野田 航・松見 淳子 (2009). 児童の漢字の読みスキルの保持・耐久性・応用に及ぼす流暢性指導の効果の実験的検討 行動分析学研究, 24, 13-25.